

11

エジプトの農村

——ナグウ・タラハーンの家族構造——

きむらよしひろ
木村喜博

はじめに

出典 『アジア経済』第16巻第10号

1975年10月

I ナグウ・タラハーンの成立とその概況

II ナグウ・タラハーンの社会的構造【一部略】

III ナグウ・タラハーンの家族構造【一部略】

ナグウ・タラハーンをあとにして【略】

はじめに

筆者は、エジプトに滞在中、農村実態調査のための予備作業を数回にわたって行なった。これは、エジプト農村の社会経済的構造を分析することをその基本的な課題とするものである。それは次のような理由による。エジプト経済は農業構造をその基本的骨格としており、この農業構造の開発を阻害し(その結果として経済発展を停滞させ)ている農業構造上の基本的な病根は、農村における膨大な小貧農層の存在にある。それゆえ、現在この膨大な小貧農層の存在を可能ならしめているエジプト農村の社会経済的構造のからくりを歴史

的な規定諸条件をも加味しながら、とくに実態分析を中心として明らかにしてみたいということである。つまり、これはきわめて現代的な問題意識に基づくものである。

さて、現代エジプトの農村研究に関する従来成果としては、ベルク(Jacques Berque)とアンマール(Hāmed Ammār)のものがあげられる⁽¹⁾。ベルクはエジプト社会省とユネスコ(UNESCO)とが行なったデルタ地区農村の調査報告をまとめた⁽²⁾。その方法は文献調査的性格をもつものであった。そして、ベルクの報告書は農村の内部を総体的に叙述した最初のものであるという点で評価に値する。他方、アンマールは上エジプトの生れ故郷をインフォーマント(informant)を雇用して調査した⁽³⁾。アンマールの問題意識は社会発展および社会変動における教育効果の測定という社会学のモデル理論の検証にあり、農村の描写は社会学理論研究のための素材の設定⁽⁴⁾としてなされたものにすぎなかった。

このように、従来のエジプト農村の研究は、文献調査(若干の実態調査を含む)を基本的な方法として、きわめて社会(学)的な視角から、農村全体を叙述的概括的に描写するという方向にあった。そして、農村の内部構造を実態および文献調査によって、社会学・経済学的視角から総体的有機的に把握し⁽⁵⁾、これを理論的に説明するという課題は未開拓のまま残されている。そこで、筆者は、後者の課題に取り組む手がかりを得るために農村実態調査の予備作業を試みた。

第4次中東戦争の余韻がまだきめやらぬ1974年6月に、農村立入りのための特別許可を取得した。しかしながら、立入り許可の時間的制限や当時の政治的状況から、この作業はきわめて限定されたものとなった。そして、結局、今回は農村の社会的構造についてその部分的、静態的な作業メモを作成したにすぎなかった。

さて、エジプトの農村に接近する場合には、その構造的性格の著しい違いから、本来的なむらと農業労働者部落的な性格をもつイズバ(izba)とを意識的に区別しなければならない。そのうち今回は、本来的なむらの例として上

エジプトのナグウ (naj') の一つナグウ・タラハーン (naj' Ṭarahān) の調査メモ——家族構造が中心——を紹介することにする。ナグウ・タラハーンはソハーグ (Sōhāg) 県の県庁ソハーグ市から北に約10キロメートルのところに位置する集落である。なお、調査は、農業協同組合の資料と3人のインフォーマントからの情報、および戸別訪問による農民との対話とを中心に実施された。

I ナグウ・タラハーン (naj' Ṭarahān) の成立とその概況

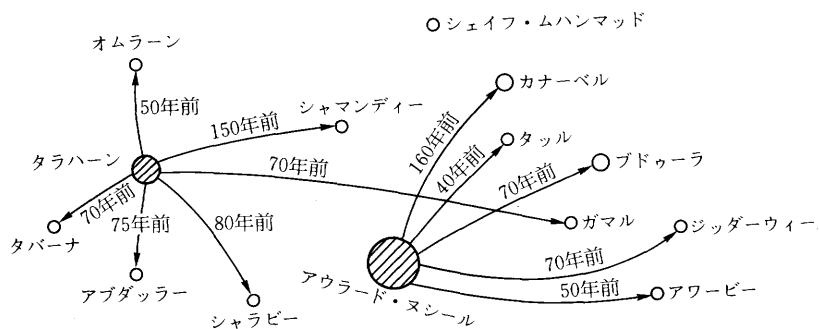
ナグウ・タラハーンは行政的にはソハーグ県、ソハーグ郡、アウラード・ヌシール ('Awlād Nuṣīr) むらに帰属し、これに統括されている。この行政単位としてのアウラード・ヌシールむらは、ソハーグ市を貫流するナイル河から分岐したソハーギヤ (Sōhāgiya) 運河とハルガウィヤ (Hargāwiya) 運河とタンターウィヤ (Ṭaṅṭāwiya) 運河の結節点から北の方向に散在する14の集落を統括している。このアウラード・ヌシールむらは農業協同組合の統括地域およびその歴史的起源の視点からさらに二つに分割される。アウラード・ヌシールむらとナグウ・タラハーンである。前者はヒジャーズ地方からエジプトに移動してきた75のカビラ (qabila——部族) のうちムサー・ビン・ヌシール (Mūsā 'Ibn Nuṣīr) に統率されていた一族の定着地である (アウラードはアラビア語で「子孫」の意味を示し、ヌシールは人名である)。このアウラード・ヌシールは後世になってまた分派を生じ、一つはアウラード・ヌシールという同名の集落としてアスワン (Aswān) 県に、他はアブー・ヌシール ('Abū Nuṣīr) むらとしてシャルキーヤ (Sharqīya) 県に定着した。他方、後者のナグウ・タラハーンは上エジプトのナグウ・ル・ハンマーディー (naj' al-Ḥammādi) からやってきてこの地の定着したと伝えられている。これら二つの部族は時代を経るうちにさらに分派を発生させることになった。前者のアウラード・ヌシールむらからは、ナグウ・カナーベル (naj' Qanāber, 約160年

前)、ナグウ・タッル (naj' Tall, 約40年前)、ナグウ・ブドゥーラ (naj' Budūrā, 約70年前)、ナグウ・ジッダーウィー (naj' Jiddāwī, 約70年前)、ナグウ・アワービー (naj' 'Awābī, 約50年前) と五つの集落が分岐した。後者のナグウ・タラハーンからは、ナグウ・オムラーン (naj' 'Umrān, 約50年前)、ナグウ・ガマル (naj' Jamal, 約70年前)、ナグウ・シャマンディー (naj' Shamandī, 約150年前)、ナグウ・シャラビー (naj' Sharabī, 約80年前)、ナグウ・アブダッラー (naj' 'Abudullāh, 約75年前)、ナグウ・タバーナ (naj' Ṭabāna, 約70年前) と六つの集落が分岐した。そしてこのほかに、別のむらから分岐・移住してきたナグウ・シェイフ・ムハンマド (naj' Sheikh Muḥammad) 集落がある。これら14の集落が一つの行政単位としてオムダ ('Umda) に統括されていた。このうち、今回の調査対象にはナグウ・タラハーンを選択した。その理由は、ナグウと呼ばれる集落を調査したかったことと、ここが調査規模として適当だったことである。

さて、このナグウ・タラハーンに属する集落(これらはすべてナグウという呼称をもっている)の概況を全体としてとらえてみると第1表のごとくなる。ただし、この表ではナグウ・オムラーンが除外されている。筆者は、この集落を訪れる機会に恵まれなかったからである。

この表からわかるように、どのナグウにも「水売り人」と店舗を構えた商

第1図 アウラード・ヌシールむら統括下集落の発生



第1表 ナグウ・タラハーン行政統括区域のナグウ

ナグウ名	シ エ イ フ	ガ フ イ ル	マ ア ス ト ン 結 婚 登 記 係	商 店	肉 屋	学 校	家 具 屋	葬 儀 屋	レ ン ガ 職 人	水 売 り	水 道	墓 地	ダッワールの数とその名前
タラハーン	3	1	1	6	5	1	1	3	2	5	1		タラハーン、サーリフ、ジャラー リ、アブド、アブー・イード、タ ワーイバ (6)
タバーナ	0	2	0	1	1	0	0	1	1	1	0		タバーナ (1)
シャラビー	1	0	0	2	1	0	0	1	0	1	0		シャラビー (1)
ガマル	1	1	0	3	0	0	0	1	1	3	0		ガマル (1)
アブダッラー	1	2	0	4	0	0	0	1	0	1	0	キリスト教1 ムスリム 1	スウーディー (1)
シャマンディー	1	1	0	5	0	0	0	1	3	2	1		シャマンディー、アブー・シード (2)

(注) 1974年6月調査。

人が存在する。ただし、商人の店舗といっても建物の構造と取扱商品は全くお粗末なもので、日用雑貨類と灯油が少々ある程度である。いわば雑貨商といえる。シェイフ (sheikh) はオムダの仕事を補佐してむらの治安維持に携わる村役人である。ナグウ・タバーナのシェイフはナグウ・タラハーンのシェイフが兼務している。ナグウ・タラハーンはシェイフが3人と多いのはこのナグウに大家族が多数存在するからである。レンガ職人はむらのはずれに煙突を建てて仕事場をつくっている。レンガには赤レンガと土レンガの2種類があり、平均的には、寝室と居間の基礎部分に赤レンガを用い、その他の台所・食糧貯蔵室・家畜小屋などに土レンガを用いている。肉屋の肉はその大半が水牛であり羊の肉は大祭礼などのときに売られる程度である。これも店舗を構える者と道の傍に三角棒をたててこれに肉を吊り下げるだけの高いとがある。鶏肉や食用バトは農民が家屋やハト飼育塔などで飼育している。ガフィールはむらの見張人で、鉄砲を肩にむらの入口や内部を徘徊している。ダッワール (dawwār) は同一系譜の大家族の公共集会の場であり、それぞれの集落における大家族の数だけ存在する。たとえば、ナグウ・タラハーンでは6大家族で6ダッワールが存在した。ナグウ・アブダッラーはキリスト教徒の集落で、キリスト教徒の墓地があった。家系としては、スウーディー

(Su'ūdi) 大家族があるだけで、ダッワールは一つである。このナグウ・アブダッラーには、また、ダッワールを所有するまでにいたらないで分散居住する若干のムスリムたちのための墓地があった。そして見張人は2人、つまりキリスト教徒たちに1人、ムスリムたちに1人いた。以上、行政区としてのナグウ・タラハーンはシェイフ、ガフィールおよびマアズーン(ma'dhūn——結婚登記係)などによって統括されていた。

さて、農業協同組合はアウラード・ヌシールむらに二つ存在し、その範囲は行政上の統轄地域にほぼ対応していた。アウラード・ヌシール農業協同組合とナグウ・タラハーン農業協同組合である。ナグウ・タラハーン農業協同組合に所属するナグウは、アブダッラー、シェイフ・ムハンマド、シャラビー、シャマンディー、カナーベル、タバーナ、ガマル、そしてタラハーンと八つであった。この農業協同組合は1954年11月10日に設立され、組合長、書記長、出納係が組合員のなかから選出されている。しかし、農業協同組合の日常の業務には地方公務員が従事している。この農業協同組合が管轄する保有耕地面積は約500フェッダン(1フェッダン=4200平方メートル)、組合員数は1971/72年度で417人であった。保有地の内訳をみると、所有地が268フェッダン17キーラート(1キーラート=1/24フェッダン)、小作地が232フェッダン1キーラートであった。今年度【1972/73年度—編者】の農業協同組合の帳簿類は毎日の業務に使用されているので借用拝見することはできなかった。そこで1971/72年度の土地台帳から全組合員の保有地面積を書き写し、これを所有・小作別、規模別に整理しなおしてみた。これら保有地の作付は系統的にコントロールされていた。まず農業省が作物別作付面積の省令を發布し、この内容を県農業局におろし、これが郡農業部を経て農業協同組合レベルにおろされる。農業協同組合の委員会で、各ハウド(hawḍ)ごとの作物指定とそのローテーションを決定する。この委員会にはシェイフ(sheikh——長老)やムファッティシュ(mufattish)やアラブ社会主義者連合のメンバーなど5人が参画する。ムファッティシュは、決定された作付体系を農民に励行させるために、毎日、農業協同組合に顔を出し、輪作耕地図をみながら組合員の耕地利用状

況をチェックし監督している。このムファッティシュの帳簿を拝借しこれと、前記土地台帳とを比較しながら作成したものが第2表と第3表である。農民全体の数を把握してこれを保有地状況別に整理したものである。

これらの表から第1に気づくことは、「農地を所有しない組合員」が存在することである。これは農地改革によってできた協同組合（農地改革組合）との間にある根本的な差異の一つである。農地改革組合は、農地改革によって2～5フェッダンの農地の分配を享受した受益者たちから構成されており、全員がたとえそれが名目的であれ農地所有者であった。これにたいして、農地改革対象以外にある従来の農業協同組合では、農地を所有していなくても農業に従事する者（実際には生産手段の一つである家畜〔水牛〕を所有している者）はこれに加入できた。それゆえ、農業協同組合には、所有地がなく農業用家畜を所有する小作農も含まれていることになる。この「農地を所有しない組合員」がこのナグウ・タラハーン農業協同組合では、農民の25.8%を占めていた。そして、彼らの小作地面積は85フェッダン16キーラート（全小作地面積の37%）でその平均は1フェッダんに、はるかに及ばない（約19キーラート）ものであった。小作地面積全体232フェッダン1キーラートのうち、146フェッダン9キーラート、つまり63%を農地所有農民が賃借していたのである。また、農地所有者についてみても、その平均所有面積はこれまた1フェッダんに及ばず（約20キーラート）、その76.6%が1フェッダン未満の極小片の農地所有者だったのである。これを保有地経営の点からみると、私有地のみを経営する農地所有者が120人、小作地のみを経営する小作人が108人、私有地と小作地とを経営する農民が189人、つまり私有地のほかに小作地を賃借している農民が農地所有者全体の61.1%に達していた。

このように、ナグウ・タラハーンでは農村社会の底辺に極貧な小農民層や小作農が大量に滞留していた。これは、何もナグウ・タラハーンに限ったことではなく、エジプト全体にみられる特徴でもある。これら小貧農層の膨大な滞留は、人口増加の激化や農業外においてこの過剰労働力を吸収できる雇用機会の欠如などと相まって、農民を生産手段の一つである農地の所有から

第2表 所有地の分布状況

規 模 (フェッタン)	農 地 所有者数	面 積	
		フェッタン	キーラート
10~15	1	14	12
8~10	1	8	23
6~8	1	6	18
5~6	1	5	2
4~5	1	4	20
3~4	7	23	15
2~3	13	28	23
1~2	47	63	10
~1	237	112	14
総 計	309	268	17

(出所) 1971/72年度のナグウ・タラハーン農業協同組合の土地台帳より作成。

(注) この表にはナグウ・タラハーン農業協同組合を構成しているタラハーン、アブダッラー、シャラビー、タバーナ、カナーベル、シェイフ・ムハンマド、シャマンディー、そしてガマルの八つのナグウが含まれている。

第3表 小作農の小作地分布状況

規 模 (フェッタン)	数	面 積	
		フェッタン	キーラート
6以上	1	6	0
3以上 ~ 4未満	2	6	0
2以上 ~ 3未満	5	10	20
1½以上 ~ 2未満	3	4	12
1以上 ~ 1½未満	13	14	6
1½以上 ~ 1未満	49	32	21
~½未満	35	11	5
総 計	108	85	16

(出所) ナグウ・タラハーン農業協同組合の土地台帳より作成。

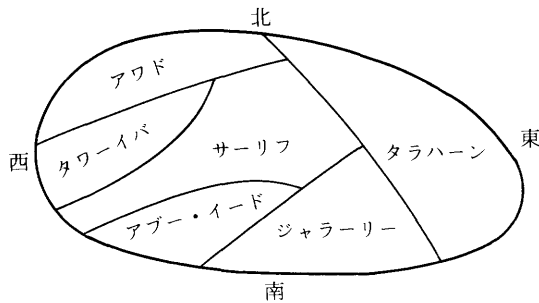
ますます疎外化することになった。他方、農地にたいする人口圧の激化は当然のことながら地主—小作関係を強化させることになった。そして、小作農の状況を一層劣悪化するにいたった。ともかく、この極貧な小農民と小作農の存在が、エジプト農業問題の根幹であることは言うまでもない。それが、このような集落（本来のむら〔qarya〕としては数えられない）ではその特徴が一層明確化しているのである。

さて、ナグウ・タラハーン農業協同組合の1971/72年度の作付体系についてみると、小麦210フェッタン、棉花110フェッタン、ゾラ・シャーミー170フェッタン、小麦のあとに作付けるゾラ・バラディ180フェッタン、玉ねぎ50フェッタンとなっていた。農民はゾラと小麦を製粉してつくったパンと野菜類、それに水牛の乳からつくった自家製のチーズを常食としている。棉花・良質小麦・玉ねぎなどは大半の農民にとって本来的には商品作物として現金収入源となるものであった。しかし、実際には、種子・肥料・殺虫剤などの農業資材の貸付けと、これら農産物の強制買上げというからくりのもとで価格操作をすることによって国家がその利潤の大半を吸収していたのである。かくて、農民は再生産のための食糧をかるうじて獲得するにすぎないほど貧しく、最低の生活水準に甘んじなければならなかった。

II ナグウ・タラハーンの社会的構造

ナグウ・タラハーン農業協同組合の統括下にある八つの集落について、社会経済構造の分析をする予定であった。しかし、これらすべてを詳細に調査することは時間的に不可能であった。そこで、ナグウ・タラハーンの世界構造の分析に焦点を合わせることにした。まず、由緒ある大家族から調べた。ナグウ・タラハーンには、タラハーン (Ṭarahān, 300年前に定着)、サーリフ (Ṣāliḥ, 200年前に定着)、アワド ('Awad, 400年前に定着)、ジャラーリー (Jalālī, 200年前に定着)、アブー・イード ('Abū 'Id, 50年前に定着)、タワー

第2図 ナグウ・タラハーン所属の大家族の住居区モデル



イバ(Tawāyiba, 70年前に定着)と六つの大家族アーイラが定着していた。これらの定着地モデル図は第2図のごとくである。これらの大家族アーイラはそれぞれダッワールを一つずつ所有していた。ただし、ここナグウ・タラハーンではこのダッワールをマンガラ (manzara) と呼んでいた。マンガラは元来ダッワールの内部にある来客接待用の部屋を意味していた。上エジプトとくにアシュート (Asyūt), ソハーグ (Sōhāg), ケナ (Qena), アスワン (Aswān) 県では、この来客接待のための部屋の名称であるマンガラがダッワール全体を指す言葉として転用されていた。下エジプトではこの転用がみられない。このマンガラは、結婚式 (花嫁はこのマンガラに入ることを認められず、花嫁の代理人と花婿が、結婚登記係の前で結婚を誓いあう), 葬儀, ハッジ (hajj—メッカへの巡礼) 帰りの祝賀 (巡礼者はハッジの称号をいただき、帰郷後1週間はここにとどまって一族から祝福を受ける), 割礼, 評議会 (大家族内部における生活上の決定および紛争の調停など), 葬儀・預言者の生誕祭・ラマダーンなどの期間における共同食事などの機能をもっていた。

このように、ナグウ・タラハーンはマンガラをその紐帯の基礎とした六つの大家族から成り立っていた。これらの大家族はその頂点にシェイフ (sheikh—長老) をいただき、その下に多数のアーイラ ('ā'ila) を束ねていた。さらにこれらのアーイラはそのなかにウスラ (usra) を内包していた。アーイラとウスラの数は固定せず変動していた。たとえば、アブ-イード大家族では

四つのアーイラ、12のウスラから構成され、タワーイバ大家族では七つのアーイラ、10のウスラから構成されていた。そして、これらアーイラとウスラは大家族の頂点にたつシェイフの父方の生理的な血統に繋がるものであった。つまり、アーイラとウスラはこのシェイフを本源とし父系の生理的な血統を基礎として形成された系譜集団のもとに内在する一構成体なのであり、現実にもむらなり集落なりを構成してその末端に位置する基本的組織体である。これが家族である。つまり、アーイラとウスラはともに家族形態を指す言葉なのである。

このアーイラ、ウスラと大家族との関係を実例に則して説明するまえに、アーイラとウスラについてその基本点を整理しておきたい⁽⁴⁾。まず、アーイラは「父一息子」を核とした父系の生理的血統を結合の原理としてこれに秩序づけられた血縁組織であり、「家長とその妻、未婚の子息・子女、妻子をかかえた既婚の子息」という原基構造が生活共同態と経営共同態とを構成するという二つの原理構造を持ちあわせた家族組織である。そして、この生活共同態・経営共同態を基盤として、結合の本質である父系の生理的血統が同一であることの相互認知のうえに、同一血統の本源としての家父がこれに連繫する構成員を支配する血縁団体でもある。このアーイラは、夫婦結合を中核としてその直接親族を結ぶ小結合体およびこの複数の結合によって荷担されていた。アーイラ家族構成におけるこの核としての小結合体である小家族がウスラと呼ばれるものである。それゆえ、ウスラとアーイラはその構造原理を共有している。構造的にはアーイラからその核である小家族が一個の生活単位として成長し胞子分裂するかあるいはアーイラがその物質的基礎を喪失して核としての小家族に解体分裂するかによって、これと構造原理を共有したウスラが家族として現われるのである。同時に、原基形態としてのアーイラは、発展拡大しその内部に別の原基形態のアーイラを分岐形成する。家族のとり結ぶ社会関係にあって、ウスラは独立の利害を有する主体者となりえないが、アーイラはその主体者として社会集団を形成する。これが大家族としてのアーイラ同族集団である。つまり、アーイラは、その物質的基礎の発展

的分裂（相続による分割）や衰頹的分裂（抵当による没収や売却）などにより、プロトタイプのアイラを発展的に成長させて父系の生理的血統という構造原理を共有するアイラとウスラとを束ねた大家族としてのアイラ同族集団を形成するか、あるいはまたこれを崩壊させて壊滅するかという構造的に大きな振幅をもっていた。

さて、アイラは、同時にまた、同一血統にたいする帰属意識、つまり祖先と子孫の同一性を保証するものとしてのアンサーブにたいする信念によって支えられていた。このアンサーブにたいする信念はアイラおよびアイラ同族集団を貫徹する。アイラがアイラ同族集団として大家族に成長しても、それは構造的にみれば単に父系の生理的血統の一結合節が発展的に胞子分裂したにすぎず、この結合原理を土台としたプロトタイプのアイラへの帰属意識は強固に観念されている。そして、これは現実には復讐時における結束単位やダッワール機能の存在として現象している。つまり、現実の家族形態としてはアイラとウスラが存在する。同時に、意識形態としてのアイラが観念的に存在し、これは現実の家族形態のアイラやウスラのみならずこれらの範囲を越えたアイラ同族集団までも貫徹しているのである。

さて、ナグウ・タラハーンはそもそもベドウィンが定着してできた集落であり、同一の父系の生理的血統にたいする帰属意識がいまなお根強く残っていた。そして、ここでは、アイラ同族集団は現実の一社会集団としてと同時に意識形態のアイラとして強烈に観念されていた。それゆえ、意識形態のアイラと現実の家族形態としてのアイラとを言葉のうえで区別できなくなっていた。農民が、タラハーン・アイラとかアワド・アイラとか言う場合のアイラは、構成体としてはアイラ同族集団であり、これに意識形態のアイラが観念的にオーバーラップしているのである。これが一個の独立した家族形態を意味しているのではない。そもそも、これらタラハーン・アイラやアワド・アイラがこの地に定着したときにはアイラまたはアイラ同族集団であった。これが世代を経るうちに分裂を繰り返して一定の系譜集団を形成したのであるが、この過程において新しいアイラが家族

集団として発生した。しかし、プロトタイプのア－イラは意識形態として依然強固に存続していた。それゆえ、筆者は、これら大家族にたいし、農民がア－イラ同族集団も家族形態としてのア－イラもともにア－イラと呼んでいる事実をふまえて、大家族ア－イラという表現を用いることにする。

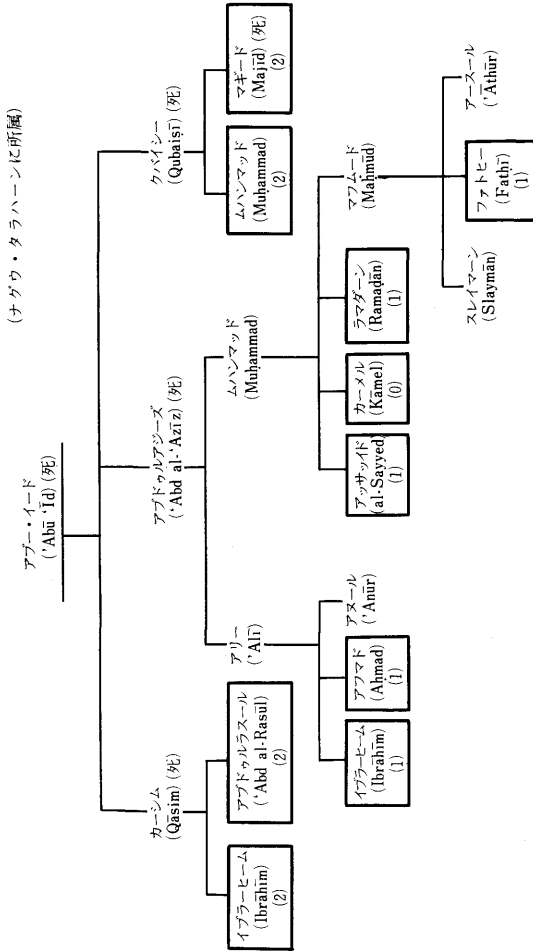
この大家族ア－イラのうち、繁雑を避けるために比較的小さな規模のものをあげてこれらの関係を説明することにする。

〔例1〕 アブー・イード大家族ア－イラ（家系図1）。ここには四つのア－イラが現存する。ムハンマッド・クバイシー（Muḥammad Qubaiṣī）⁽²⁾、ムハンマッド・アブドゥルアジーズ（Muḥammad ‘Abd al-‘Aziz）、アリ（Ali）、アブドゥルラスール（‘Abd al-Rasūl）がそれぞれ家長または家父長である。ムハンマッド・クバイシーの家族は構造的にはウスラ形態をとる。ムハンマッド・アブドゥルアジーズの家族は3世代に繋がる大家族である。この一構成体であるマフムード（Maḥmūd）の家族自体がア－イラの原基構造を形成しており、ファトヒー（Fathī）はウスラ形態の家族を形成している。この父親と息子の家族を別個に数えると、ムハンマッド・アブドゥルアジーズのア－イラは五つのウスラから構成されていることになる。アリーの家族もア－イラ形態をとりそのなかに三つのウスラを内包している。アブドゥルラスール（‘Abd al-Rasūl）とイブラーヒーム（Ibrāhīm）の家族は家父カーシム（Qāsim）の逝去によって独立の利害を有するウスラに移行しつつあるものの、農具・家禽・家屋・炉を共有しながら、かつて父カーシムが形成していたア－イラのプロトタイプを存続させているのである。農地の分割相続によって構造的には私的独立の契機を含みながらも、生活共同態・経営共同態の枠組みをいまだ解体させることなく残存させ、かろうじてプロトタイプのア－イラを意識しているのである。この大家族ア－イラにはア－イラ形態としては四つの家族が、ウスラ形態としては12の家族が存在していた。この基本的構成は第4図のごとくモデル化できる。

〔例2〕 タワーイバ大家族ア－イラ（家系図2）。この家系は子供の数が少なく、家族は父系の逝去によって容易にウスラ形態に分岐していった。原

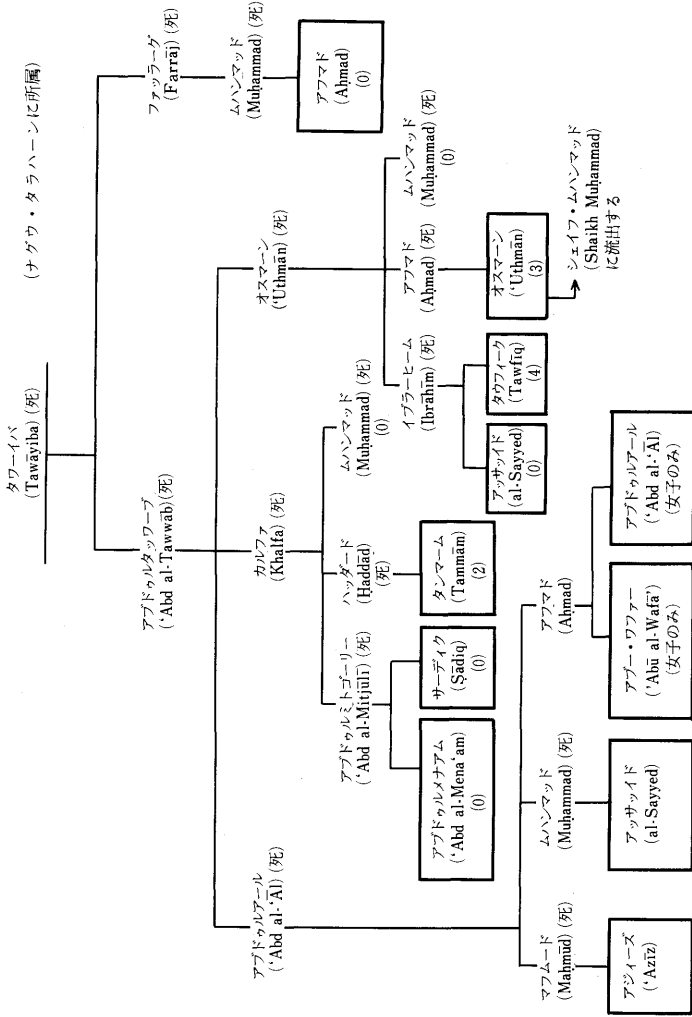
第3図 大家族ア－イラの家系図

(家系図1) アブー・イード大家族ア－イラ



- (注) 1) すべて人名である。人名の下の () のなかの数字は子供の数。
 2) □はウスラ形態の家族を示す。
 3) (死) はその人物が死亡していることを示す。
 4) これらの家系図では女性が含まれていない。

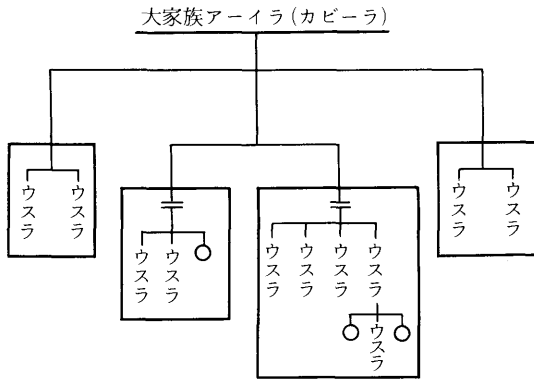
(家系図 2) タワーイバ大家族ア－イラ



(注) 表記法は (家系図 1) に同じ。

(家系図 3) 【略】

第4図 アブー・イード大家族アーイラの基本的構成



- (注) 1) □はアーイラを示す。
 2) ○印は、ウスラを形成するまでにいたらぬ構成員。
 3) =印は、アーイラの家父長が生存していることを示す。

基形態のアーイラにあるのはアフマド・アブドゥルアール (Aḥmad ‘Abd al-‘Āl) の家族のみである。構造的にはウスラであるがまだプロトタイプとしてのアーイラを存続させているのがサーディク (Ṣādiq) とアブドゥルメナム (‘Abd al-Mena‘am) の家族、およびアッサイド (al-Sayyed) とタウフィーク (Tawfiq) の家族の2家族である。これらはそれぞれウスラとして構造的には独立しているが、同一の経営共同態(農具・家畜の共有)と生活共同態(家屋と炉を共有)をかりうじて存続させているもので、同一のアーイラへの帰属意識が、いまだにみられる例である。その他の、アフマド・ムハンマッド (Aḥmad Muḥammad), タンマーム (Tammām), アッサイド・ムハンマッド (al-Sayyed Muḥammad), アジーズ (‘Azīz) はそれぞれウスラ形態の家族構造を示している。この大家族アーイラには、アーイラ形態として七つの家族が、ウスラ形態として10の家族が存在している。

【後略】

III ナグウ・タラハーンの家族構造

以上のように、ナグウはその規模の大きいものになると大家族アーイラが数個集合して集落をつくるが、小さいものでは大家族アーイラが1個でつまりそれ自体として集落をつくる。そして集落にはこれを構成する大家族アーイラの数だけダツワールが存在する。ナグウ・タラハーンは六つの大家族アーイラによって構成され六つのダツワールが存在した。ナグウ・タバーナ、ナグウ・シャラビー、ナグウ・ガマル、ナグウ・アブダッラーはそれぞれ大家族アーイラそれ自体がナグウを構成し、ダツワールはそれぞれ一つ存在した。ナグウ・シャマンディーは大家族アーイラ二つで構成され、ダツワールも二つ存在した。これらのダツワールを基礎として、大家族アーイラはその統一性を保証され、社会生活上の一つの単位をつくっていた。

大家族アーイラは、内部で構造的に胞子分裂を繰り返しながら成長するが、その物質的基礎が不十分で独立した経営共同態を形成できないときには、自立できないウスラに解体していくか、または生計を維持するために生活共同態を存続させる方向（実際にはある者が他の者に寄生する）に向かうことになる。とくに、ナグウ・タバーナのように貧困な大家族アーイラでは、世代の交替とともにそれが個体として自立できようができまいがに関係なく、容易にウスラ形態への解体が進行するのであった。自立できない農家がウスラとしてその数を増加させていくなかで、農具・家畜の共有や家屋・炉の共同というかたちが現われたが、これらは、本来的には、家父による家父長制的支配の基盤をなすものであった。家父による家父長制的支配がなくなって、この支配下にあった構成単位がウスラ形態へと移行しても、現実には経済的に自立しえないで、プロトタイプ的生活共同態を存続させていた。このように、アーイラがその結合の基礎としながら同時に自らの構造的拡大分裂の契機としてかかえていた父系の生理的血統は、構成単位としてのウスラが自立できないときには逆に生活共同という紐帯の基礎となりえたのである。とくに、

父系の生理的血統を基礎としたアンサーブ帰属意識は、カルヤ (qarya) よりもナグウにおいて強固に維持されていた。そして、ナグウでは大家族アーイラの独立性が強く、ダッワールの機能もいまだ強固に存続していた。他方、カルヤ (とくに下エジプト) では大家族アーイラの独立性が薄れアーイラの独立利害が強固になり、ダッワールもオムダの属する大家族アーイラのダッワールのみがそのカルヤのダッワールとして意識されるようになっていた。

さて、次に婚姻と相続についてみてみよう。このように血縁の紐帯が強固なところではとくにみられることであるが、婚姻においてはビント・ル・アンム (bint al-'amm—父方のいとこ〔女性〕) にたいしてイブヌ・ル・アンム ('ibn al-'amm—父方のいとこ〔男性〕) が優先権を持っていた。ある女性に別の大家族アーイラに属する男性から求婚がある場合には、その女性の父親は娘のイブヌ・ル・アンムにたいして娘との結婚の意思があるかどうかを打診しなければならない。もし、その意思がなければこの外部の求婚者に機会が与えられることになる。また、婚姻に際してはマハル (mahr) と呼ばれる婚資が男性側から女性側に支払われる。これは婚姻時に全納する必要はない。その金額が階層によって変化のあることは当然である。制度上は2度に分割して払うことができる。結婚と離婚のときである。分割しても一括してもよい。婚姻証書に書き込まれる金額は税金にたいする配慮から実態とかけ離れていることが多い。これら婚姻の範囲を三つの大家族アーイラについて述べておく。

〔例1〕 アワード大家族アーイラ

現存のウスラにおける妻の出所を調べた結果は次のとおりである。51のウスラのうち同じアワード大家族アーイラの系譜集団に属する女性との婚姻が33ウスラ (64.6%)、同じ集落 (ナグウ・タラハーン) に属する別の大家族アーイラとの婚姻が7ウスラ、両者をあわせた40ウスラ (78.4%) が同一集落内での婚姻ケースとなる。集落外部との婚姻 (アウラード・ヌシールとの婚姻3ケースを含む) は11ウスラであった。同一系譜集団内部での婚姻がいかに多いかわかる。この関係を小規模な大家族アーイラについてさらに詳しく説明してみ

よう。

〔例2〕 アブー・イード大家族アーイラ

この大家族アーイラの婚姻は第5表のとおりであった。これを家系図1と対照してみるとわかるとおり、13のウスラのうち5ウスラが同一系譜集団のピント・ル・アンムとの婚姻のケースであった。第5表でいえば、ウスラ番号1, 3, 5, 9, 11がこれに該当する。2ウスラ(番号8, 10)を除いた11のウスラ(84%)が同一系譜集団内部での婚姻を行なっている。ここでも、血縁的紐帯がいかに強固であるかが示されている。さらに、もう一つの例として大家族アーイラ一つから成るナグウ・タバーナについてこれを見ておく。

〔例3〕 ナグウ・タバーナの場合【略】

以上のように、ナグウ・タラハーンとナグウ・タバーナに見られる婚姻サークルは地理的にも血縁的にもきわめて小さいいわば「近親的」なものであった。この血縁的紐帯の強固さは、ややもすると同一家系の大家族アーイラ全体が原型のアーイラとして意識されることの理解を容易たらしめるものがある。つまり、農民はプロトタイプのアーイラへの帰属意識を前記のごとき婚

第5表 アブー・イード大家族アーイラの婚姻ケース

ウスラの家長	妻の出所
1 マギード	カーシム[アブー・イード]の娘
2 ムハンマッド・クバイシー	ムハンマッド・アブドゥルアジーズの娘
3 ムハンマッド・アブドゥルアジーズ	カーシム[アブー・イード]の娘
4 マフムード	アブドゥルラスール・カーシムの娘
5 ラマダーン	アリー・アブドゥルアジーズの娘
6 カーメル	ムハンマッド・クバイシーの娘
7 アッサイド	マギード・クバイシーの娘
8 ファトヒー	ソーハーグから
9 アリー	クバイシー[アブー・イード]の娘
10 アフマド	ソーハーグから
11 イブラーヒーム・アリー	ムハンマッド・アブドゥルアジーズの娘
12 アブドゥルラスール	アリー・アブドゥルアジーズの娘
13 イブラーヒーム・カーシム	ムハンマッド・アブドゥルアジーズの娘

姻関係によってますます強めるがゆえに、大家族系譜集団としてのアーイラ同族集団とプロトタイプのアーイラとを同一のものとして意識しているのである。アーイラ同族集団の規模が小さければ小さいほどこの意識が強固に残存することはむろんのことである。

さて、次に相続についてみる。土地財産については原則的にはたとえそれが極小であっても、もし家父長がこれを所有している場合には、彼の逝去と同時に妻子によって分割相続された。この場合、土地が数カ所に散在するときにはそれぞれの場所で均等分割が行なわれた。この分割の方法は、必ず、灌漑水路にたいして直角になされた。平行にすると、分割相続地の肥沃度と水利用に関して不平等が生じるからである。それゆえ、相続の過程が重なるにつれて、極端に細い条の土地片が生まれてきた。他の動産についての相続方法は確認することができなかった。土地が無いときには、家屋や家畜や農具などの財産がイスラム法に従って均分に相続されたと言われているが、これも具体的に個々の例を調べ上げることができなかった。また、相続時における動産・不動産の価額評価が具体的にどのようなになされるのかについても確認できなかった。ただ、婚姻によって持参した女性の財産(農地やその他の動産)は、離婚に際してすべて持ち帰るのを習慣とした。つまり、婚姻によって、夫と妻の財布は一つになっても、そこでの勘定は別個のまま存続していたのである。夫のもの、妻のもの、両者共有のものというかたちで勘定がなりたち、共有のものは離婚時に折半されていた。

さて、相続地および小作地のいずれであれ、土地の経営は原則として個別的になされていた。しかし、自立できないウスラで農具や家畜などを共有する場合には経営は共同でなされていた。このような場合、もし相続地があってもその大半はきわめて細片で別個に経営することが困難であった。そのうえ、国家によってその経営が統制され(作付の指定、農業資材の貸付けと融資およびその生産者の買上げという仕組みを設定し、そこでの価格操作を通して農民を収奪する)ていた。各農民が個別的に経営体として自立できる萌芽は、農民自身のおかれた社会経済的条件に加えて国家の圧力のもとにすべて摘みとられ

ていたのである。このような状況下にあつて、極細片の私有地と小作地は、農民がそれぞれ個別的に経営するかまたは兄弟同士で共有の農具で共同に経営するかのいずれかであった。この両者のいずれの場合であれ、実際の消費生活の点についてみると、共同の炉が存在していた。親類同士(とくに兄弟家族)が集まって1週間ないし10日分のパンを一度に共同で焼いている。ナグウ・タラハーンでは家屋が共同であるケースが多くみられたが、この場合は当然のことながら炉は共同であった。

以上、ナグウ・タラハーンの社会構造を家族の内部構造を中心にして静態的に描写してきた。これだけでは全体的な評価をすることはむずかしい。けれども、ナグウの特徴についてその基本点を指摘することは許されるであろう。まず、ナグウは血縁集団としてその大家族が一つまたは数個定着してできた集落であること。それゆえナグウは地縁社会というよりも血縁社会としての性格を強くもつものであった。第2に、ナグウは定着のときから土地所有の規模がきわめて小さかったこと。その理由についてはいまのところ判断の材料がない。しかし、この物質的基礎の脆弱さが、大家族内部構造の発展的ないし衰頹的分裂の進行にともなつて、半自立的なウスラの創出を安易ならしめた要因の一つであつたことは事実である。これらのウスラが小貧農層や小作農層の骨格を形成していた。ただし、これは、農村をとりまく経済的諸条件からの説明ではなく、単に農村の内部構造からの説明にすぎない。第3に、ナグウにみられたきわめて強い血縁的紐帯は、半自立的な形態へと構造的に分裂していく家族がその生計を維持するためにこの分裂とは反対の方向に形成する経営・生活共同態(とくに生活共同態)の基盤となつていた。以上、きわめて一定の視角からナグウの構造をみてきたにすぎない。さらに詳細な調査がなされなければならないことはいうまでもない。

ナグウ・タラハーンをあとにして【略】

〔注〕

はじめに

- (1) 他に「エジプト農村」という題名で最近2冊の本が出版されたが、いずれも土地制度や土地所有の歴史的・分析的な中心を置いた文獻的研究であって、農村の社会的構造の実態分析からはほど遠いものである。‘Awad, Maḥmūd, *al-qarya al-miṣrīya*; ‘Abd al-Fattāḥ, Faṭḥī, *al-qarya al-miṣrīya*. また、Ayrout, Henry, *Fellahs D’Egypte*, Caire, 1952もあるが、これは農村の観察記にすぎず、農村社会の分析を行なったものではない。
- (2) Berque, Jacques, *Histoire sociale d’un village Égyptien au XXème siècle*, Mouton Paris, 1957; Berque, “Sur la structure sociale de quelques villages Égyptiens,” *Annals*, No. 2, 1955.
- (3) Ammār, Hāmed, *Growing Up in an Egyptian Village*, London, Routledge & Kegan Paul Ltd., 1954.
- (4) H. Ammārは、上エジプトのSilwa村を、社会学理論の検証のための素材として、とくに伝統的社会的モデルとして描写した。
- (5) 農地改革を社会発展との関係でとらえようとしたM.S.S. Gadallaの業績も、少数のエステートにおける農業労働力を数量的に扱っただけで、本来の農村における構造分析には何ら触れることがなかった。Gadalla, M.S.S., *Land Reform in Relation to Social Development of the Farm Population in Egypt*, University of Missouri, 1960.

II

- (1) 拙稿「農地改革前におけるエジプト農村社会の構造」(川島武宜・住谷一彦編『共同体の比較史的研究』アジア経済研究所, 1973年) 270~279ページ。
- (2) 人名の表記法は、「本人→父→祖父→…」と父方の系譜を遡ってなされる。たとえば、ムハンマッド・クバイシーでは、ムハンマッドが本人の名前、クバイシーはムハンマッドの父の名前となる。これとともに、呼称法として由緒ある家名を維持する慣習もある。たとえば、祖父シェリーフ、父アフマド、本人ファーデルのとき、シェリーフという由緒ある名(預言者ムハンマッドの子孫の称号)を残したいがために、自らをファーデル・シェリーフと称するなどである。

(木村喜博／執筆時：アジア経済研究所調査研究部，現：調査企画室主任調査研究員)